

「第2回 全国博士課程教育リーディングプログラム 合同女子会」報告書

LD1 稲田 萌花

11月16・17日「第2回 全国博士課程教育リーディングプログラム 合同女子会」に参加した。全国の女性博士過程学生が熱海の温泉旅館に集い、それぞれの分野の壁を越え、女性のリーダーシップのあり方を考えた濃い2日間であった。日々大学で奮闘している学生とともに、熱海の旅館という憩いの場所でリフレッシュすることができたが、それと同時に「安心した」という思いが強かった。一貫制博士課程に進学することを決断した時、自分の意思は固まっていたものの、あと5年間を過ごすことに対し不安要素がたくさんあった。その一つに自分が「女性」であるということがあり、とても心懸かりであった。博士号を順調に習得した場合でも卒業する年は27歳であり、その後仕事キャリアを積む時に、結婚・妊娠・出産・子育てを両立することが可能であるのか。同様な悩みを持つ学生が多い中、今回の女子会では、学生の他に博士過程を取得し社会で活躍している4人の社会人の方を交えた合宿であったので、悩みを相談し社会での実状を知ることができた。

初日、顔合わせをした時、意外にも女性ばかりで新鮮だと感じたとともに、なぜか緊張が走った。その場の空気がキラキラしているように思えたからだろうか。振り返れば、その場の空気も自分色に変えてしまう志を持った芯の強い女性が多かったからだろうと納得がいく。緊張していた私であったが、自己紹介が終わった頃には皆と打ちとけ合い、積極的に意見交換ができるようになっていた。

1日目は、長年ソニーでキャリアを積んできた高松さんから「女性とリーダーシップ」について講義があり、2日目は「ダイバーシティーな組織でのリーダーシップ」「メンタルヘルス」についての講義があった。本講義で現代に生きる私たちが女性として活躍するためには、女性ということ意識しないことが一番だと思っていたが、現実はそんなに甘くないことがわかった。かつての日本では、女性が社会で働くことが窮屈であったが、今の社会は変わりつつある。この変わっていくダイバーシティーな組織で生きるには自分が何者であるのか、女性としての特徴を理解する必要がある、女性として働けることに自信を持つことが大切であることを学んだ。

今回の女子会では、有意義な講義を受講したが、さらに参加した学生とコネクションを作れたことが自分の財産になった。2日間と短い期間であったが、自分の思いを熱く語れたこと、そして同じ志を持つ学生と意見交換をしたこと、さらには偶然なことに同様の分野の研究をしている学生と研究の話をして盛り上がったこと、など様々な経験をすることができた。この女子会を企画したお茶の水女子大学の学生に感謝するとともに、今後もこの関係性を大切に、次回は私が同様の企画を提案し実現させたいと思った。